

「聖霊を受けなさい」

(ヨハネ20:19～23)

挽地茂男

2019.6.9. 日本基督教団千歳丘教会

ドストエフスキーの『罪と罰』の中に、主人公のソーニャが、もう一人の主人公のラスコーリニコフにヨハネによる福音書の「ラザロの復活」の記事を読んで聞かせる場面があります。ソーニャは家族のために自分の身を売って娼婦（公娼）となった少女。ラスコーリニコフは自分の理想・思想に従って、高利貸しの老婆を殺害した殺人犯です。そのラスコーリニコフがソーニャにこう切り出します。

「ラザロの復活はどこかね？ さがしてくれ、ソーニャ」

ソーニャは横目でちらと彼を見た。「そんなところじゃないわ…第四〔ヨハネ〕の福音書よ……」と彼女はその場を動こうともせず、けわしく小声で言った。「さがして、読んでくれ」そしてソーニャが読み始めます。……〔中略〕……《イエスはマルタに言われた、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」マルタは言った、「終わり

の日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」マルタはイエスに言った》ソーニャはラスコーリニコフに読み聞かせているにもかかわらず、自分の声を通してまるで自分に語られているかのように、聖書の言葉を読み続けます。ソーニャの様子に、ドストエフスキーはこのよう



Carl Bloch "Lazarus"

な説明を加えます。（そして、苦しそうに息をつぎながら、ソーニャはまるで自分がみんなのまえで懺悔しているように、一語一語はっきりと力を込めて読んだ）そして読みながらソーニャと聖書の登場人物のマルタが重なります。主イエスが言います。「あなたはこれを信じるか」

《「主よ、信じます。——これはヨハネ福音書ではマルタの台詞で

すが、もうソーニャ自身の言葉になっています——あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であることを信じております」》それはマルタの言葉でありながら、ソーニャの信仰告白でした。このあとしばらくラザロの復活の朗読が続く……〔中略〕……そして「ラザロの復活はこれで終わりです。」そしてドストエフスキーの説明が続きます。……ひんまがった燭台の燃えりこりのろうそくはもうさっきから消えそうになっていて、不思議な因縁でこの貧しい部屋におちあい、永遠の書を読んでいる殺人者と娼婦を、ぼんやり照らしだしていた。（工藤訳、下88-94）と結ばれます。このあとドストエフスキーの物語は、「消えそうになってい」たラスコーリニコフとソーニャの人生の灯が再び輝き始めるプロセスを追いかけていきます。

ドストエフスキーが愛読したヨハネによる福音書に見出した復活、そしてソーニャとラスコーリニコフの物語に託して再現した復活とは何でしょうか。彼らの復活とは、娼婦に身を落としたソーニャが再びその汚辱から再生した聖さを与え

られて立ち上がり、殺人者ラスコーリニコフが、人の心をもった、人間の交わりの中に再び立ったということなのです。（「復活」を意味するギリシア語の一つは字義通りには《再び立つ》ἀνάστασιςという意味です。）すべての復活の基礎は主イエスの復活です。死から再び立ち上がるということです。ドストエフスキーにとって主イエスの復活は、死に代表されるすべての絶望からの回復の可能性を、新しい生命の可能性を



意味しています。キリスト信仰とは、ドンと行き詰まったイエスの墓から始まる、墓から生まれる新しい生命を生きる信仰なのです。

本日の聖書箇所は最初の弟子たちの、回復の過程（プロセス）を描いています。①自分たちの師〔先生〕を失って、前途の視界が閉ざされた弟子たち。②その弟子たちを主イエスが訪れます。そこから、弟子たちの新しい出発が始まっていきます。③信仰者の始まりは——どんな始まりにしろ——主への信頼

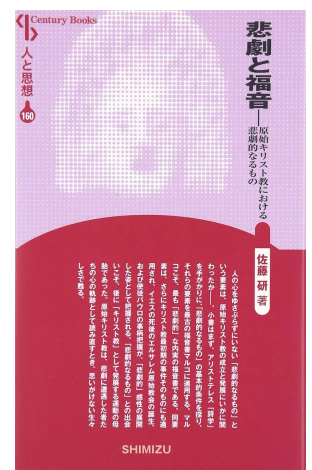
（の回復）から始まるのです。そして④キリスト信仰とは——繰り返しますが——ドンと行き詰まったイエスの墓から始まる、墓から生まれる新しい生命を生きる信仰なのです。

その始まりの時、弟子たちは閉ざされた部屋の中に引きこもっていました。19節前半です。

20:19a その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。

主イエスの弟子たちは、主イエスを失って、自分たちの家の中に引きこもってしまいました。ユダヤ人たちへの恐怖からでした。主イエスを亡き者とした宗教指導者たちが自分たちをも、同じように扱うのではないかという恐怖でした。しかし彼らは、主イエスに従うために、すべてを棄てて、主の後に従ってきた人々でした。主イエスから「人間を取る漁師」として使命を託された人なのです。そのためには、自分のいのちさえ惜しまないと言った人たちなのです。しかし、現実の恐怖はそれほど甘いものではありませんでした。恐怖に出会うと人は、身を堅くして縮こまり、外

に対して内側へと自分を閉ざすのです。恐怖のために身構えたその心と身体からは、新しい一歩は出て来ません。しかし、この現実の恐怖に打ち勝たない限り——つまり恐怖を乗り越える何か（力）を持たない限り——彼らが使命を果たすことはできないのです。この恐怖から勇気への展開を可能にしたが「復活」だと聖書は教えます。「復活」はわたしたちの心理的な変化のことを言うものではありません。ある研究者（佐藤研）は「喪の作業」という言葉を使って、「復活」を説明しました。弟子たちは主イエス亡き後、徹底して喪に服し、イエスを追憶することによって、ついに彼らの心にイエスが甦ったというのです。復活を心の問題、精神の現象として説明すること、つまり復活を心理化すると一面とても理解しやすいのですが、復活の一面しか捉えていません。復活は人間の心の問題として、内面からじわりとにじみ出て来る心情の変化や決心ではないのです。それは外側から、わたしたち



の合理的理解を超えてやって来るのです。主イエスは心理的に閉ざされた弟子たち（わたしたち）に、主イエスは合理的に閉ざされた弟子たち（わたしたち）に、主イエスは物理的に閉ざされた弟子たち（わたしたち）の部屋に、顕れます。主イエスは、わたしたちの人生の向こう側からわたしたちに近づき、わたしたちに顕れる方なのです。ユダヤ人を恐れて閉ざされた部屋にいる弟子たちのところへ、突然主が現れたのです。弟子たちの恐怖を打ち消す、呆氣にとられるような出来事でした。

閉ざされた部屋と閉ざされた心は、開かれなければなりません。その開かれていくプロセスを聖書はこう伝えます。19b－21節。
20:19bそこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20:20
そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。

閉じた部屋にいる閉じた弟子たちのところへ、突然その「閉塞」



（状態）を打ち破る要素が介入し

たのです。弟子たちが恐怖を乗り越えて行く第一歩でした。しかしその第一歩は、決してがむしゃらな勇気(蛮勇)となって現れたものではありませんでした。まず弟子たちの心に帰ってきたのは、平和と喜びでした。それは主イエスが共におられることから生まれる平和と喜びでした。弟子たちの心が開かれ始めたのです。

主イエスは、力づくで弟子たちの心を開かれたものではありません。主イエスは、力づくで閉ざされたものを開く方ではありません。ご自分の「手とわき腹とをお見せにな」ります（v.20）。この傷は、直接的には、あの十字架で負われた傷でした。それは主イエスの語ったメッセージと生涯の全体を象徴しています。そしてその傷は、主イエスに対する人々の無理解と、弟子たちの無理解を指さしています。しかしその傷は、今や復活を背景にして、大きな意味を持ちはじめます。そこに立っているのは、傷を負った復活者なのです。傷を負いながら、弟子たちを「赦し」彼らに平安と喜びをもたらす「癒し人」として立っているのです。やがてこの主イエスの傷に癒された弟子た

ちは、自分自身も傷つきながら人を癒す「傷ついた癒し人」として人々に仕えるようになるのです。弟子たちは、その生涯を通して、主が負われた傷、聖なる傷、聖痕（ステイグマ）を身に負うことになるのです。弟子たちのほとんどが命をも惜しまず福音を伝える人と成っていったのです。これは無理強いして、させることのできることでないのです。

ある人が、大学のキャンパスで遊んでいるリスがあまりに可愛いので、自分にペットのように馴^なれてくれるといいのに、と思いました。手っ取り早くは、彼は、毘か何かを使ってリスをつかまえて、力づくでカゴに入れて自分のペットにすることもできるでしょう。しかしこの時、「力づくで」ということが、ペットにするためには、最も効果の薄いやり方なのです。彼はそうしませんでした。彼は手のひらを開いて、その上に餌を載せて、忍耐強く待ったのです。長い時間をかけて、何日もかけて、リスはやっと手のひらの餌を食べるようになりました。リスをつかみたい、抱きしめてみたい衝動に駆られながら、やはり忍耐を続けたのです。やがて、

手から肩へ、肩から頭へと平気でリスは彼と接触をするようになったのです。この人は後に宣教師となって来日します。そして、彼の宣教師としての活動の中で、主イエスの愛はこのような愛だと語りました。主イエスは、外からわたしたちの心の扉を叩きつつ、力づくでわたしたちを開かせようとするのではなく、わたしたちを待っておられるのです。そして今も、主はその手を開いてわたしたちに、ご自身の愛を示しておられるのです。そして主の手のひらには、あの傷があるのです。

冒頭でご紹介した『罪と罰』の結末に記される、ソーニャとラスコーリニコフの復活の場面です。ソーニャは、研究者によれば、



キリストという名を持たないドストエフスキーのキリストなのですが、送致されたシベリアの寂寥^{せきりよう}たる原野をまえにして、ソーニャがラスコーリニコフのそばに現れる場面をドストエフスキーはこう描きます。
突然、彼のそばへソーニャが現れた。彼女は音も立てずにそばへ来

て、彼とならんで腰をおろした。
…〔中略〕…（中村訳、下341-342）
このへんは復活した主イエスが弟子たちに現れた記事を読んでないと雰囲気がよく分からない部分です。

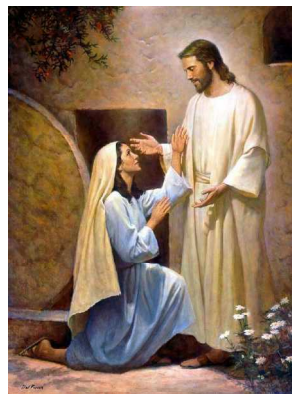
どうしてそうだったか、彼は自分でもわからなかったが、不意に何ものかにつかまれて、彼女の足もとへ突きとばされたような気がした。彼は泣きながら、彼女の膝を抱きしめていた。最初の瞬間、彼女はびっくりしてしまって、顔が真っ蒼になった。彼女はぱっと立ち上がって。ぶるぶるふるえながら、彼を見つめた。だがすぐに、一瞬にして、彼女はすべてをさとした。彼女の両眼にははかり知れぬ幸福が輝きはじめた。彼が愛していることを、無限に彼女を愛していることを、そして、ついに、そのときが来たことを、彼女はさとした、もう疑う余地はなかった……

二人は何か言おうと思ったが、何も言えなかった。涙が目にいっぱいたまっていた。二人とも蒼ざめて、やせていた。だがそのやつれた蒼白い顔にはもう新生活への更生、訪れようとする完全な復活の

しょうこう

曙光が輝いていた。愛が二人をよみがえらせた。二人の心の中には互いに相手をよみがえらせる生命の限りない泉が秘められていたのだった。

私達が今読んでいるヨハネ福音書20章から21章には、七つの復活（顕現）のエピソードが納められています。今日読んでいるのは、その三つ目のエピソードです。福音書は、繰り返し復活の物語を語ります。それが初代のキリスト教会の命であり力であったからです。まだ新約聖書自体が存在しない。教団も組織もない状態の信仰者たちが生きたのはこの復活のメッセージによるのです。弟子たちは復活顕現された主イエスとの出会いを通して、新しい生命に、復活の命に生き始めるのです。この



出会いは、弟子たちの努力の結果として生じるものではありません。強い信念の結果でもありません。主ご自身が弟子たちに出会われるのです。〔人生の〕向こう側から、恐れに向こう側から主ご自身が出会われるのです。そして弟子たちは、

復活のメッセージの証人として、地の果てにまでこのメッセージを伝えるために出て行ったのです。

復活の主イエスとの出会いが、弟子たちの派遣の基盤です。こう書かれています。21-23節。

20:21 イエスは重ねて言われた。
「あなたがたに平和があるように。
父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」
20:22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。20:23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

主は弟子たちに「あなたがたに平和があるように」と語られます。

(20:19, 21) これは単なるイスラエルで習慣的に交わされる挨拶の「シャローム(=平和)」ではありません。それは二度にわたって「平和」が語られていることからわかります。これは、ユダヤ人への「恐れ」(v. 19)に対する平和(平安)ということなのです。それは派遣の前提条件としての平和(平安)であります。恐れの中の平安であります。それは、主イエ

スがゲツセマネの祈りの苦闘の中で得た平安(17章)と同種の平安であります。おそれの中の平安。戦いの中の平安なのです。

主はその派遣にともなって、聖霊の助け、聖霊の力を与えられます。川田殖先生は聖霊を



「神の心と力」と説明されます。ですから、教会はそれとはなしに(ごく普通に生活しているのですが)、神の心を大切にし、神様の力に助けられて前進していることに気づきます。それは聖霊の働きなのです。

主イエスは「20:22 彼らに息を吹きかけて(言われた。)」**「聖霊を受けなさい」**と言われます。「息を吹きかけて」という表現は、最初の人アダムの創造の記事に並行します。(息は遠くから吹きかけることができない。主はわたしたちの近くにおられる。)主の行為は弟子たちの再創造のプロセスを示しています。創造の霊が授与され、アダムの創造が再現されます。創世記の記事はこうです。「**創2:7 主なる神は、土(アダム)の塵で人(ア**

ダム) を形づくり、その鼻に命の息 (נְשֵׁמַת חַיִּים) を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」神が人の鼻に「命の息」を吹き入れると、人は生きる者となります。70人訳ギリシア語旧約聖書〔B.C. 3cから翻訳開始〕は、創世記のこの記事をこう訳しています。

LXX Gen 2:7 καὶ ἔπλασεν ὁ θεὸς τὸν ἄνθρωπον χοῦν ἀπὸ τῆς γῆς καὶ ἐνεφύσησεν εἰς τὸ πρόσωπον αὐτοῦ πνοὴν ζωῆς καὶ ἐγένετο ὁ ἄνθρωπος εἰς ψυχὴν ζῶσαν

「そして神は土地の塵で人を形づくり、その顔に命の息を吹きかけられた。すると人は生きた魂となった(=生命となった／生きる者となった)。」神が人の顔に息を吹きかけられると、人は生きる者となります。ヨハネのイメージはこのギリシア語旧約聖書に基づいています。

神が「息を吹きかける」ことによって人は生きる。この箇所で行われている「息」というヘブライ語の同義語に רוּחַ (ルーアハ) という言葉があります。この言葉はヘブライ語で「霊」を意味する代表的な言葉です。このヘブライ語の

「霊」を意味する רוּחַ もギリシア語で「霊」を意味する πνεῦμα (プ

ネウマ) も同時に、息や風という意味をあわせ持っています。弟子たちは(今は目の前におられるが、主の昇天後) 目に「見えない主」と共に働く第一歩を標そうとしています。キリスト者の働きと生活は、この神の息に生かされて、神の霊に導かれて、神の風の吹く道に、前進するのです。主の霊によって生かされる者が、他者を生かす者となるのです。霊は生かすものだからです。

合唱をやっている人に聞いたお話ですが、合唱をそろえるためには隣の人の呼吸に自分の呼吸を合わせる ことが必要だと言いま

す。キリスト者の働きは、神の息とともに、神の息と呼吸を合わせ、神と息を合わせて、また神の風に押し出されて実践されるていくのです。初期のキリスト教徒は、聖書の証言によると、この聖霊の力によって働くということを体験した人々でありました。パウロは主なる神がわたしたちを通して働くということを知っていた使徒です。パウロはこう語っています。



15:17 そこでわたしは、神のために働くことをキリスト・イエスによって誇りに思っています。15:18 キリストがわたしを通して働かれたこと以外は、あえて何も申しません。キリストは異邦人を神に従わせるために、わたしの言葉と行いを通して、15:19 また、しるしや奇跡の力、神の霊の力によって働かれました。こうしてわたしは、エルサレムからイリリコン州まで巡って、キリストの福音をあまねく宣べ伝えました。

十字架を救済の根拠とし、復活をその救済の保証として神が言われていることは何でしょうか。そのメッセージは何でしょうか。前進を阻む罪、過去へと我々を呪縛する罪の記憶。神はそれらにけりをつけたと言われるのです。ですから十字架と復活のメッセージとは、平たく言えば「あとは全部引き受けた。思いきり生きよ」ということなのです。新しい一週間も、主と共に歩んでまいりましょう。祈ります。

2019.6.9. 日本基督教団千歳丘教会



20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20:20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。20:21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」20:22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。20:23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

20:19 Οὕτως οὖν ὁψίας τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ τῇ μιᾷ σαββάτων καὶ τῶν θυρῶν κεκλεισμένων ὅπου ἦσαν οἱ μαθηταὶ διὰ τὸν φόβον τῶν Ἰουδαίων, ἦλθεν ὁ Ἰησοῦς καὶ ἔστη εἰς τὸ μέσον καὶ λέγει αὐτοῖς, Εἰρήνῃ ὑμῖν. 20:20 καὶ τοῦτο εἰπὼν ἔδειξεν τὰς χεῖρας καὶ τὴν πλευρὰν αὐτοῖς. ἐχάρησαν οὖν οἱ μαθηταὶ ἰδόντες τὸν κύριον. 20:21 εἶπεν οὖν αὐτοῖς (ὁ Ἰησοῦς) πάλιν, Εἰρήνῃ ὑμῖν· καθὼς ἀπέσταλκέν με ὁ πατήρ, καὶ ἐγὼ πέμπω ὑμᾶς. 20:22 καὶ τοῦτο εἰπὼν ἐνεφύσησεν καὶ λέγει αὐτοῖς, Λάβετε πνεῦμα ἅγιον· 20:23 ἂν τινων ἀφῆτε τὰς ἁμαρτίας ἀφέωνται αὐτοῖς, ἂν τινων κρατῇτε κεκράτηνται.